

# 兵衛志殿御返事

安元年五月 五七歳

御ふみにかゝれて候上、大式の阿闍梨のかたり候は、ぜに十連余れん並びにやうやうの物ども候ひしかども、たうじは農時のうどきにて 人もひきたらぬよし も及び候はざりけ 兵衛志殿の御との 御夫馬ふまにても て候よし申候。

夫それ百濟国より日本国に仏法のわたり候ひしは、大船にのせて此をわたす。今のよど河より近江あをみの水海につけて候ものは、車にて洛陽へは運はこび候。それがごとく、たといかまくらにいかなる物を人にたびて候とも、夫と馬となくばいかでか 日運が命はたすかり候べき。童子は土の餅を昔徳勝仏に 阿育大王と 供養くやうしまいらせ候ひしゆへに、阿育大王の第一の大らだいきち臣羅提吉となりて一閻浮提の御うしろめ、所謂大臣をい殿の御時のごんのたいふどの権大夫殿のごとし。

此は彼等にはにるべくもなき大功德。此の歩馬は金泥駒こんでいこまとなり、此の御との人は車しゃの車くと倉ねりとなりて、仏になり給ふべしとを思ぼしめすべし。抑そもそもすぎし事なれども、あまりにたうとくうれしき事なれば申す。

昔はらなこく波羅奈国にまからおう摩訶羅王と申す大王をはしき。彼の大王にふたり二の太子あり。所謂善友太子・悪友太子なり。善友太子の如意宝珠を持ちてをはせしかば、此をとらむがために、弟をとの悪友太子は兄の善友太子の眼をぬき給ひき。昔の大王は今のじょうぼんのう浄飯王、善友太子は今の釈迦仏、悪友太子は今のだいばだつた提婆達多此なり。兄弟なれども、たからをあらそいて、世々生々にかたきとなりて、一人は仏となり、一人は無間地獄にあり。此は過去の事、他国の事なり。我が朝には一院・さぬきの院は兄弟なりしかども位をあらそいて、ついかたきとなり給ひて、今に地獄にやをはすらむ。当眼世めにあたりて、此の代の危あやをきも兄弟の争あらそいよりをこる。大将殿と申せし賢人も、九郎判官等の舎弟等をほろぼし給ひて、かへりて我が子ども皆所従等に失はれ給ふは眼前の事ぞかし。

とのばら二人は上下こそありとも、とのだにもよくふかく、心まがり、道理をだにもしらせ給はずば、右衛門ゑもんたいふのさかんだのの大夫志殿はいかなる事ありとも、親をやのかんだうゆるべからず。右衛門ゑもん大夫のたいうは法華経を信じて仏になるとも、親をやは法華経の行者なる子をかんだうして地獄に墮つべし。とののはあにとをやとをそんずる人になりて、提婆達多賢がやうにをはすべかりしが、末代なれども、かしこき上、欲なき身と生まれて三人ともに仏になり給ひ、父ち方かた、母は方かたの類るいをもすくい給ふ人となり候ぬ。又との殿御子息等もすへの代はさかうべしとをぼしめせ。此の事は一代聖教をも引きて百千まいにかくとも、つくべしとはをもわねども、やせやまいと申し、身もくるしく候へば、事々申さず。あわれあわれ、いつか見げざん参に入て申し候はん。又むかいまいらせ候ひぬれば、あまりの嬉うれしさに、語かたられ候はず候へばあらあら申す。よろづは心推にすいしはからせ給へ。女房の御事同じくよろこぶと申させ給へ。恐々謹言。